



聖獣たちの献身



中世の教会や市庁舎の高みから下界をうかがうガーゴイルは、吐水口という建築上の必要から取り付けられた装飾的な石像だ。よこしまな存在や想像上の獣を象るグロテスクな彫像の、知られざる歴史に着目する。

文 フランシスコ・カル

彼らは世界中に何十万とい
て、城や宮殿の屋根にちよこんと座っ
ている。教会や大聖堂、とりわけ
ゴシック期に建てられた、それら
の外壁や飛梁の上に、彼らはよく
姿を現す。その隊列は幾重にも連
なり、無限に続くかのようだ。高
いところから私たちを眺め、怯え
あがらせてやろうと機会をうか
がっている。半人半獣のそのおぞ
ましい姿は、中世の石工が見たひ
どい悪夢の産物か。しかし彫刻師
は心を込めて石の吐水口にその姿
を彫ったのだ。彼らの名は、ガー
ゴイル。

意味。ドイツ語ではワッサーシューバ
イヤード、「水を吐く者」という
意味だ。英語ではガーゴイル、ス
ペイン語ではガルゴラ、ポルトガ
ル語ではガルグラ。これらはフラ
ンス語のギヤルグイルからきた
語だ。これは、水を飲み込む音
を表すラテン語の「gurgire」（ガール）
と、喉を意味する古フランス語の
「gole」（グイル）を合わせた言葉
で、吐水口からこぼこぼと流れ出
す水の音を表したものと考えら
れている。

このフランス語の呼び名は19
世紀後期に使われるようになった
ものだが、装飾的な吐水口の
歴史はさらに時代を遡る。エジプ
ト、ギリシャ、エトルリア、ローマ
の人々は古くから石やテラコッタ
でできた楯に動物や怪物の彫刻
を施していたが、これらも中世の
ガーゴイルと同じように、雨水を
壁の外に流し出す導管設備以上
の役割を担っていた。単なる装

(右) エクアドルはキトの
バシリカ教会にある2頭の
三爪アラクイのガーゴイル。
猿やジャガーなど、エクアドルの
動物たちと並んで鎮座している。
(左) フランスのルーアンにある
ゴシック様式のノートルダム
大聖堂の南正面に、めつと姿を
現す半人半獣の石像。



飾ではなく、守護者の象徴としての役目を負っていたのである。例えば、バルテノン神殿にあるライオンの頭のガーゴイルは、外敵や悪霊から都市を守るパワーを象徴している。雨水の侵入を物理的に防ぐこと、守護者の象徴、装飾という3つの機能は、文化・地域・時代の違いを超えて、世界中のあらゆるガーゴイルに多かれ少なかれ備わっている。北京の天壇、バルセロナのサグラダファミリア教会、エクアドルのキトにあるネオゴシック様式のバシリカ教会の石造吐水口を見ればそれは明らかだ。そして興味深いことにキトのバシリカ教会では、アリゲーターやアルマジロ、カメといったエクアドル特有の動物と共に、ヨーロッパの宗教建築に見られるガーゴイルの姿を見ることができるのである。

とはいえ、私たちの集団的潜在意識のなかで、ガーゴイルは中世と不可分に結びついている。これはおそらく、ロマネスク後期からゴシック初期にかけて、キリスト教が急速な広がりを見せる一方、建築の世界においても数々の偉業が成し遂げられたからであろう。

キリスト教の世界では悪のイメージが重要視される。とすれば、ガーゴイルと悪の世界との間に、数世紀にわたる密接な関係が築かれていたとしても不思議ではない。これは、北フランスの都市ルーアンの司教、聖ロマンとガーゴイルにまつわる伝説にはつきりと示されている。昔、ルーアンを流れるセーヌ川の畔に、炎の息を吐くドラゴンのような怪物ガーゴイル（ギヤルグイル）が棲んでいた。人々は怪物の怒りを鎮めるために人身御供を差し出したが無駄だった。600年頃のこと、ロマヌス（聖ロマン）という名の司教がやってきて、みながキリスト教に改宗し教会を建てるならガーゴイルを退治しようと約束した。ロマヌスはこの怪物に取りついた悪霊を追い払って生け捕りにし、キリスト教徒に改宗したルーアンの市民に引き渡した。彼らはガーゴイルを殺し、その尻を焼いた。

しかし、怪物の頭と首は炎の息で硬く強くなっていたため、燃え尽きることはなかった。そこで人々は、将来また現れるかもしれないガーゴイルへの見せしめとして、町を囲む城壁の上にその首を晒した。この物語は、ただガーゴイルの運命を伝えるだけでなく、悪に対する善の勝利、あるいは中世初頭にはヨーロッパのほぼ全域に残っていた異教に対するキリスト教の勝利の隠喩でもあるのだ。

このガーゴイルと悪の関係は、なぜこんなにも多く悪魔になぞらえたものが生み出され、そのなかにきわめて秀逸な傑作さえ存在するのか、その理由をよく物語っている。例えば、スペインのカセレスに立つコリア大聖堂にある墮天使ルシファアの像は、彼が天使から悪魔に変身する瞬間を表している。全身を鱗で覆われ、角、鋭い爪、コウモリのような翼を生やした、見るもおぞましい悪魔の姿

(上) 北京の天壇には竜のガーゴイルがずらりと並んでいる。
[左ページ] (左上から時計回りに) スペインのバレンシア大聖堂に棲む鷲。スペインのカセレスに立つコリア大聖堂にあるこの石像はルシファアが天使から悪魔に変わる瞬間を表している。ノートルダム大聖堂の屋上回廊からパリの街を見守る装飾目的のガーゴイル。このように吐水口としての機能が備わっていないものもある。



(上) スペインのカセレスにある
ブラセンシア大聖堂のガーゴイル。
根棒を振りかざす野蛮な猿の
足元には切り落とした敵の頭が
転がっている。
(右) 14世紀に建てられた
バレンシア大聖堂には、

蛇腹カメラを手にした
フロックコートの男の
ガーゴイルがある。1910年頃に
大聖堂を修復した建築家の
ヘロニモ・アロヨが、亡き友人に
敬意を表して取りつけたと
言い伝えられている。

だ。こうした悪夢のような生き物が威嚇のポーズをとり、無言の叫びを発して人々を怯えさせようとする姿は、いろいろな場所で見ることができる。悪魔のような姿をしたガーゴイルのほかにも、ドラゴンやグリフィンといった想像上の動物や、ヒエロニムス・ボスやブリュゲルの描く、幻覚のような絵画から抜け出してきた奇妙な生き物を彷彿とさせる、何とも名状しがたい怪獣など、実に多様なバリエーションがあるが、そこには必ず威嚇の含意がある。このように多様性のある悪の化身は、中世からルネサンス期になると、身近な動物に否定的なイメージを負わせるかたちで表現されるようになる。例えば、豚や猿は大食いや強欲(色欲)の象徴として用いられ、ロバは怠惰の象

徴とされた。さらに下って15世紀に入ると、人間のさまざまな悪行を直接的に表現する手法がとられるようになる。酒癖の悪さは、ワインの革袋を鷲掴みにして歌をがなる酔っ払い。色欲と不道徳な音楽というきわどい組み合わせは、夫のある女性が操る糸車の傍らに座った、バグパイプ吹き姿として石に刻まれている。その煽情的な音色が女性を豚の姿に変えてしまう、という光景の描写である。

ルネサンス期の思潮はガーゴイルの姿にさらなる影響を及ぼした。例えば、色欲の罪とその罰を表すために、トロアの神官ラオコーンの姿が用いられることもある。ラオコーンは、かつてアポロンの神殿内で彼の妻と情交した罰として、アポロンの遣わした海蛇に絞め

殺されている。墮落した行為は、総じて尻を見せて振り返るサテュロスの姿によつて表現される。これは、秩序が覆された、混乱した世界を象徴している。肯定的な意味合いをもつガーゴイルもある。悪魔のような姿の生き物は、やがて、悪霊を追い払う力を備えたライオンや犬、もしくは、教会や城の力が及ばない場所に巣食う邪悪な力と戦い続ける勇気を、忠実な信者に与える慈悲深い存在にとつて代わられる。また、善と悪の戦いを象徴する対決の場面を表現しているものもある。スペインのブラセンシア大聖堂(これもカセレスにある)の残忍な野猿の像はその好例で、足元には殺戮した敵の頭が転がっている。悪の勢力との戦いとは無関係らしいガーゴイルも見られる。建築資材の石

PHOTOGRAPHS: SYLVAIN SONNET/HEMIS/CORBIS ISTOCKPHOTO DIRK RENCKHOFF/ALAMY PEDRO PEGENAUTE MASSIMO LUSTRI/CORBIS

